

第一章 浮舟の物語 浮舟失踪後の人びとの動転

[第一段 宇治の浮舟失踪]

かしこには(宇治山荘では)、人びと、おはせぬを求め騒げど、かひなし(女房たちが御不在の姫を探して騒いでいたが見つかりません)。*物語の姫君の(大将の咎めを恐れる内舎人を初めとした侍たちが血眼になって探し回る様子などは、よくある物語の姫君が)、人に盗まれたらむ明日のやうなれば(男に盗み出された夜の翌朝と同じようなことなので)、詳しくも言ひ続けず(詳しくは申しません)。*「物語の姫君」は注に<『伊勢物語』第六段、『大和物語』第百五十四段、同百五十五段など。>とある。折角なので、また参照できるウェブページも多いので雑観すると、『伊勢物語』第六段は<「芥川」(比定地は摂津国、大阪府高槻市芥川町あたり)>、『大和物語』第百五十四段は<「立田山・立田川・竜田川」(比定地は大和国、奈良県生駒郡龍田地域)>、『大和物語』第百五十五段は<「安積山(あさかやま)・山の井」(比定地は陸奥国、福島県郡山市日和田町)>、などと通称される話らしい。どの話も<身分の低い男が高家の姫を盗み出す話>のようなので、左様に補語する。

京より、ありし使の帰らずなりにしかば(京から遣わせた使者が帰らなかったのも)、おぼつかなしとて、また人おこせたり(どうしたかと、母君はまた別の使者を宇治山荘に遣しました)。

「まだ、鶏の鳴くになむ(まだ鶏の鳴いている早朝に)、出だし立てさせたまへる(奥方は私を遣わせなさいました)」

と使の言ふに(と遣いが言うのを)、いかに聞こえむと(この姫の失踪を、如何奥方にお話し申したら良いのかと)、乳母よりはじめて、あわて惑ふこと限りなし(乳母を初め女房一同は慌て惑ふことこの上ありません)。思ひやる方なくて、ただ騒ぎ合へるを(他の女房たちは姫の行方に見当も付かず、ただ騒ぎ合っているが)、かの心知れるどちなむ(事情を知る右近と侍従の二人は)、いみじくものを思ひたまへりしさまを思ひ出づるに(思い詰めていらっしやった姫の様子が思い出されて)、「身を投げたまへるか(身投げなされたか)」とは思ひ寄りける(と感付きました)。

泣く泣くこの文を開けたれば(乳母が泣く泣く奥方の手紙を開き読むと)、

「いとおぼつかなさに(あなたの事が心配で)、まどろまれはべらぬけにや(一睡もできなかったのも)、今宵は夢にだにうちとけても見えず(昨夜は夢でさえあなたとゆっくりとは会っていません)。物に襲はれつつ(不吉な予感に胸騒ぎして)、心地も例ならずうたてはべるを(私まで体調が悪くなっています)。*なほいと恐ろしく(やはり、姫の幸運を妬む世間の憎悪の祟りが心配されるので)、ものへ渡らせたまはむことは近くなれど(お引越しの日は近いけれど)、そのほど、ここに迎へたてまつりてむ(それまでの間は当家にお迎え申すことにします)。今日は雨降りにはべりぬべければ(今日は雨降りになりそうなので、明日にでも迎えを差し向けます)」 *「なほいと恐ろしく」は注に<『集成』は「本妻方の呪詛など恐れるのであろう」と注

す。>とある。大将の正妻とは女二の宮だが、私の推量ではこの年で17歳くらいだ。いや、むしろ若い時ほど思い詰めるのかもしれないが、怨念は単に好き嫌いで憎む気持とは違って、積み重なった不本意な経緯で深まるように思えるので、私には「本妻方の呪詛」に然程の凄みは感じられないが、やんごとなき内親王の身分で蔑ろにされるのは堪えられない、という身分意識が染み付いた生活感であれば、相当な圧力を感じたのかも知れない。確かに母君は前の手紙で「時々立ち寄せたまふ人の御ゆかりもいと恐ろしく」(浮舟巻七章七段)と正妻の妬みを懸念していた。ただ、母君がそう思う背景には、今回の薫大将殿の引越指示を姫が存外の幸運に恵まれた標として喜んで浮かれていた様子が浮舟巻五章五段・六段に描かれていて、諦め掛けていた姫の上流生活の仲間入りが実現するという認識があつてのことだ。だから私としては<正妻の>と言うよりは、姫の幸運を妬んだ<世間の(タタリ)>と読んで置きたい。いずれにせよ、「いと恐ろしく」思うから「物に襲はれつつ心地も例ならずうたてはべる」ことになるのだろう、というのが現代人らしい考え方だ。

などあり(とありました)。昨夜の御返りをも開けて見て(女房たちは何か手掛かりがあるかと、昨夜の姫の御返事も開けて見て)、右近いみじう泣く(右近は大泣きします)。

「さればよ(やはりそうか)。心細きことは*聞こえたまひけり(姫はこんな気弱な歌を奥方にお詠み申しなさっていたのだ)。*「聞こえたまふ」は貴人の謙譲動作を第三者が示す言い方。注には<浮舟が母に。辞世の歌をさす。>とある。姫が返書として書いた歌は「後にまたあひ見むことを思はなむこの世の夢に心惑はで(和歌 51-21)」で、巻数に書き付けたのが「鐘の音の絶ゆる響きに音を添へてわが世尽きぬと君に伝へよ(和歌 51-22)」だった。

我に、などかいささかのたまふことのなかりけむ(私に如何して少しも仰って下さらなかったのか)。幼かりしほどより、つゆ心置かれ*たてまつることなく(幼い時から姫は私に何も気構えなさっていらっしゃることもなく)、塵ばかり隔てなくてならひたるに(少しの疎遠さもなくて来たのに)、今は限りの道にしも(今生の別れの時になって)、我を後らかし(私を遠ざけて)、けしきをだに見せたまはざりけるがづらきこと(身投げの素振りさえお見せにならなかったとは薄情な) *「たてまつる」は貴人の自発動作を第三者が謙譲意で示すので、主語の貴人が<~していらっしゃる>という尊敬語表現になる、ようだ。

と思ふに(と思うと)、足摺りといふことをして泣くさま(地団駄を踏んで悔し泣きするのは)、若き子どものやうなり(子供のようです)。いみじく思したる御けしきは(思い詰めていらした様子は)、見たてまつりわたれど(ずっと拝して来たが)、かけても(少しも)、かくなべてならずおどろおどろしきこと(このような突飛な大それた事を)、思し寄らむものとは見えざりつる人の御心ざまを(思い付きなさるとは見えなかった姫のお苦しみを)、「なほ(それにしても)、いかにしつることにか(どうしてこんな)」とおぼつかなくいみじ(と右近は量りかねて落胆します)。

乳母は、なかなかものもおぼえで(乳母は姫の身投げを仄めかす手紙に、却って混乱を深めて)、ただ、「いかさまにせむ。いかさまにせむ」とぞ言はれける(ただ、どうしよう、どうしよう、と言わずには居られません)。

[第二段 匂宮から宇治へ使者派遣]

宮にも(兵部卿宮に於かれても)、いと*例ならぬけしきありし御返り(ただならぬようすの姫の返歌なので)、「いかに思ふならむ(何を考えているのだろう)。我を、さすがにあひ思ひたるさまながら(私を、それでもこうして返歌して来るのだから、愛してはいるようだが)、あだなる心なりとのみ(姿を消すと言っているようなこの歌は、私が浮気に過ぎないと)、深く疑ひたれば(深く疑っている)、他へ行き隠れむとにやあらむ(大将の方に行って私からは身を隠そうということだろうか)」と思し騒ぎ(と慌てなさって)、御使あり(宇治に宮の使者が来ました)。*「例ならぬけしきありし御返り」は注に<浮舟から匂宮への返書。「からをだに」の歌(浮舟巻)。>とある。姫の返歌は「からをだに憂き世の中にとどめずはいづこをはかと君も恨みむ(和歌51-20)」とあった。

ある限り泣き惑ふほどに来て(山荘の女房たちが全員泣き惑っている所に来た使者は)、御文もえたてまつらず(御手紙を姫に取り次がせることも出来ません)。

「いかなるぞ(何があったのか)」

と下衆女に問へば(と下女に聞くと)、

「上の(姫様が)、今宵、にはかに亡せたまひにければ(この夜に急に亡くなったので)、ものもおぼえたまはず(大騒ぎです)。頼もしき人もおはしまさぬ折なれば(後見の人もいらっしやらない時なので)、さぶらひたまふ人びとは、ただものに当たりてなむ惑ひたまふ(女房殿は皆途方に暮れていらっしやいます)」

と言ふ(と言います)。心も深く知らぬ男にて(この使者は事情を深く知らない者だったので)、詳しう問はで参りぬ(詳しくは聞かずに帰って参りました)。

「かくなむ(こういうことでした)」と申させたるに(と取り次がせ申すと)、夢とおぼえて(宮は夢に思えて)、

「いとあやし(それは変だ)。いたくわづらふとも聞かず(ひどく患っているとも聞いていない)。日ごろ、悩ましとのみありしかど(近頃はずっと不調とあったが)、昨日の返り事はさりげもなく(昨日の返書はそんな風でもなく)、常よりもをかしげなりしものを(いつもより趣向があったものを)」

と、思しやる方なければ(と納得できなさらなかった)、

「時方、行きてけしき見(時方が行って様子を見て)、たしかなること問ひ聞け(確かな事を調べよ)」

とのたまへば(と仰ると)、

「かの大將殿、いかなることか、聞きたまふことはべりけむ(大將殿は宮様と姫のことに付いて何か、お聞きになっていらっしゃることがあるようです)。宿直する者おろかなり(門番が弛んでいる)、など戒め仰せらるるとて(などとお叱りなさって)、下人のまかり出づるをも、見とがめ問ひはべるなれば(下働きの出入りさえ確かめるようですので)、ことづることなくて(尤もらしい理由も無しに)、時方まかりたらむを(私が出向きまして)、ものの聞こえはべらば(私の素性を知る者でも居て、注進申せば)、思し合はすることなどやはべらむ(大將殿は宮様のお通いを確信なさるかもしれません)。さて(そのように)、にはかに*人の亡せたまへらむ所は(急に誰か死人が出なされた所では)、論なう騒がしう(言うまでもなく混乱していて)、人しげくはべらむを(人も多く出ているものですから)」と聞こゆ(と時方は申します)。 *「ひと」を時方は<姫>の心算で言っているのだろうか。だとすれば、時方は姫が死んでいると思っていることになるが、仮にその可能性を考えたとしても、時方の立場で、宮が「いとあやし」と姫の死を信じていないこの時点で、そんな事を宮に言えるとは思えない。少なくとも、表向きの言い方としては<誰か(死人が出た)>なのだろう。

「さりとては(そうは言っても)、いとおぼつかなくてやあらむ(分からないままにして置けようか)。なほ、とかくさるべきさまに構へて(やはり何とか手を打って)、例の、心知れる侍従などに会ひて(例の事情を知る侍従などに会って)、*いかなることをかく言ふぞ(誰の死を姫の死などと言うのか)、と案内せよ(と聞き出せ)。下衆はひがことも言ふなり(事情を良く知らない下女は間違いを言うものだ)」 *「いかなることをかく言ふぞ」の主語は、宮は遣いの「男」から報告を受けたのだから、「下衆女(げすをんな)」なのだろう。

とのたまへば(と宮が仰るので)、いとほしき御けしきもかたじけなくて(その釈然としない御様子も畏れ多いので)、夕つ方行く(時方は夕方に宇治へ発ちます)。

[第三段 時方、宇治に到着]

かやすき人は(わずかな従者で自ら馬上の使者に立つ身軽な時方は)、疾く行き着きぬ(短時間で宇治に着きました)。雨少し降り止みたれど(雨は少し降り止んでいたが)、わりなき道にやつれて(山道のぬかるみで)、下衆のさまにて来たれば(下侍のように泥まみれで山荘に来てみると)、人多く立ち騒ぎて(人びとが大勢立ち騒いで)、

「今宵、*やがてをさめたてまつるなり(今夜直ぐに姫を埋葬申すらしい)」 *「やがて」は<直ぐに、直ちに>。「をさむ」は<納める→仕納める→形を着ける→葬る>ということらしい。火葬か土葬かは分からないが、田舎なら土葬だろうか。「たてまつる」という謙讓表現は対象体が<姫君>だという事を示す、のだろう。「なり」は体言状態(体言または連体形に付く)の認識断定語用ではなく、事態推移(終止形に付く)の伝聞知覚語用。

など言ふを聞く心地も(などと言うのを聞くにつけても)、あさましくおぼゆ(本当に姫が死んだのかと驚きます)。右近に消息したれども(右近に自分の到着を知らされたが)、え会はず(右近は面会に応じず)、

「ただ今、ものおぼえず(今は動転しています)。起き上がらむ心地もせでなむ(起き上がる気力もありません)。さるは(しかし、姫がお亡くなりになった今となつては)、今宵ばかりこそ(今夜までの)、かくも立ち寄りたまはめ(こうしてお立ち寄りでしょうから)、え聞こえぬこと(お話し申せないのは、残念です)」

と言はせたり(と取次女房に言わせて来ました)。

「*さりとて(やはり姫が亡くなったようだが)、かくおぼつかなくては(こう詳しい事情が分からないままでは)、いかが帰り参りはべらむ(どうして帰って宮様にお話し申せようか)。今一所だに(もう一人の方には、会えませんか)」 *「さり」は<姫の死>という認識のようで、こういう重要な事柄を曖昧な言い方で話を進める、というのはこの語り手の普通の姿勢だが、読者はしっかりと推移を読む事が必要なのだろう。

と切に言ひたれば(と切に言ったので)、侍従ぞ会ひたりける(侍従が会いました)。

「いとあさまし(本当に驚きです)。*思しもあへぬさまにて亡せたまひにたれば(御自身でも意外でいらっしやったような急変で病死なされたので)、いみじと言ふにも飽かず(悲しいでは言い足りず)、夢のやうにて(本当のこととも思えず)、誰も誰も惑ひはべるよしを申させたまへ(此処の誰もが呆然としていると宮様にはお伝え下さい)。すこしも心地のどめはべりてなむ(少しでも気持が落ち着きましてから)、日ごろも、もの思したりつるさま(姫君の最近の思い悩んでいらっしやった様子や)、*一夜(先だつての夜に)、いと心苦しと思ひきこえさせたまへりしありさまなども(会わずにお帰りいただいた事を、とても心苦しく思い申しなさっていたことなども)、聞こえさせはべるべき(お話し出来るかと存じます)。*この穢らひなど(喪中の)、人の忌みはべるほど過ぐして(謹慎期間が過ぎてから)、今一度立ち寄りたまへ(もう一度お立ち寄り下さい)」 *「思しもあへぬさま」は<思つてもいらっしやらなかった急変>という言い方だから、侍従は時方に、というか兵部卿にだが、姫の死を<急変した病死>として説明したのであり、一先ずは真相を伏せて置こう、という方針を右近と相談したらしい様子だ。確かに、私にもそれは無難な処置かと思える。また、忌明けにでも「今一度立ち寄りたまへ」とも言っているので、真相は後で話すと仄めかしているようでもある。 *「ひとよ」は注に<浮舟が匂宮を。先夜、逢わずに帰したこと。>とある。 *「このけがらひなど」は注に<死の穢れ。近親者は三十日間家に籠もる。>とある。今は三月末なので、四月いっばいが喪中だ。

と言ひて、泣くこといといみじ(と言って後は泣くばかりです)。

[第四段 乳母、悲嘆に暮れる]

内にも泣く声々のみして(邸内にも女房たちの泣く声ばかりがして)、乳母なるべし(乳母らしき者が)、

「あが君や、いづ方にかおはしませぬ(姫君は何処へいらっしゃったのですか)。帰りたまへ(お帰りください)。むなしき骸をだに見たてまつらぬが(亡骸さえ押し申せないのが)、かひなく悲しくもあるかな(空しく悲しい)。明け暮れ見たてまつりても飽かず*おぼえたまひ(毎日押ししてもいつまでも可愛くいらっしゃって)、いつしかかひある御さまを見たてまつらむと(いつか立派な花嫁姿を押ししたいと)、朝夕に頼みきこえつるにこそ(日々期待申すことで)、命も延びはべりつれ(寿命も延びました)。うち捨てたまひて(そんな私をあなた様はお見捨てになって)、かく行方も知らせたまはぬこと(こんな風に行方もお知らせ頂けないとは、情けない)。 *「おぼえたまひ」は注に<「たまふ」は浮舟に対する敬意。乳母が思う。>とある。が、話者の謙讓語の「たまふ」はハ行下二段活用で、「たまひ」は四段活用の連用形なので、これは姫が主語の尊敬語だ。ということは、この「おぼえ」は<乳母の思い>でもあるだろうが、むしろ姫の属性としての<誰からもそう思われるであろうこと(=可愛らしさ)>という言い方なのだろう。

鬼神も(おにがみも)、あが君をばえ領じたてまつらじ(姫君を奪い申し上げられまい)。人のいみじく惜しむ人をば(誰もがこんなに惜しむ姫なら)、*帝釈も返したまふなり(帝釈天も神薬で生き返らせなさるだろう)。あが君を取りたてまつりたらむ(我が姫君を取り上げ申した)、人にまれ鬼にまれ(人であれ鬼であれ)、返したてまつれ(返し申せ)。亡き御骸をも見たてまつらむ(亡骸であっても押し申したい) *「帝釈(たいしゃく)」は注に<帝釈天のせん子蘇生伝説を踏まえる(伝説せん子経)。>とある。「帝釈天/伝説せん子経」でウェブ検索すると、「不知の森」サイトの「読経記」というコーナーの「No. 0175 伝説せん子経 一卷 聖堅訳」項に<釈尊が比羅勒国で比丘たちへ、過去世で慈慧菩薩だった時、盲目の長者夫妻を憐れみ、下生して睽と名のり孝養に尽した故事を説かれた。睽が十歳になると、長者一家は望み通り、山中で隠棲することにした。睽が庵を結び父母の面倒を見ていたところ、迦夷国王が狩猟に来て睽を誤射してしまった。王はこれを痛恨に思い自ら手当したにもかかわらず、睽は父母の老後を頼んで息をひきとる。王は父母の元へ謝罪に行き、皆で嘆き悲しんでいたら、彼の人柄を惜しんだ帝釈天が神薬を与え生き返らせたという。>という掲載文がヒットした。是を頼る。

と言ひ続くるが(と言ひ続けているのが)、心得ぬことども混じるを(病死だとすれば亡骸の無いはずのなく、得心が行かないこともあるので)、あやしと思ひて(時方は変に思って)、

「なほ、のたまへ(もっと詳しく話してくれ)。もし、人の隠しきこえたまへるか(もしや大将殿が姫を隠し申しなさったのか)。たしかに聞こし召さむと(確かな事をお知りになろうと)、御身の代はりに出だし立てさせたまへる御使なり(宮様が御自身の代わりに遣わしなされた使者が私なのだ)。今は、とてもかくてもかひなきことなれど(今はどういふことにせよ姫を取り戻す手立てはないが)、後にも聞こし召し合はすることのはべらむに(後からも宮様は事の次第を聞き合わしなさることがあるので)、違ふこと混じらば(私の報告に間違いがあれば)、参りたらむ御使の罪なるべし(使者として参った私の罪になるではないか)。

また、さりともと頼ませたまひて(また、まさか姫が亡くなったのではあるまいと期待なさって)、『君たちに対面せよ(あなたや右近殿に会って話を聞け)』と仰せられつる御心ばへも(とあなた方を信じて私に使者を命じなされた宮様の御信頼に対しても)、かたじけなしと

は思されずや(本当のことを話さなくては恐れ多い、とはお思いにならないのですか)。女の道に惑ひたまふことは(君主が女に溺れて国を傾けなされることは)、人の朝廷にも(ひとのみかどにも、唐の政府でも)、*古き例どもありけれど(古い例のいくつかがあったが)、*またかかること(他に宮様が姫のことで思い悩んでいらっしやるほどのことは)、この世にはあらじ(この世には無いだろう)、となむ見たてまつる(と拝し申します)」 *「ふるきためしども」は注に<中国の漢武帝と李夫人や玄宗皇帝と楊貴妃の話が有名。>とある。 *「またかかること」の「また(他の)」と考察する比較対象は「人の朝廷にも古き例どもありけれ」だから、「かかること」の近称指示は<宮が姫に「惑ひたまふこと」>になりそうだ。しかし、兵部卿との仲を思い悩んで身を投げたらしい姫に比してさえ、宮の態度は軽々しく見えるが、まして大国の皇帝に比して、さらにそれ以上の深い悩みなどという言い方は、家来だからこそその主君に対する敬意ではあるのだろうが、兵部卿の愛も立場も客観的にはそれらの比較対象に成り得る社会的等価性属性を見做し難く、文意が成立しないように思えて、論理構文を疑ったが、他の文意は取れなかった。

と言ふに(と言うと)、「げに(時方殿じきじきのお越しとは、確かに)、いとあはれなる御使にこそあれ(並々ならぬ宮のお気持があつての使者らしい)。隠すとすとも(隠そうとしても)、かくて例ならぬことのさま(このような只ならぬ事件は)、おのづから聞こえなむ(自ずから事情が知られることになるのだろう)」と思ひて(と侍従は思つて)、

「などか(どうして)、いささかにても(少しでも)、人や隠いたてまつりたまふらむ(大将殿が姫君を隠し申しなさったのかもしれない)、と思ひ寄るべきことあらむには(と思えるに足る手掛かりでもあるのなら)、かくしもある限り惑ひはべらむ(このように此処の女房全員が狼狽しましょうか)。

日ごろ、いといみじくものを思し入るめりしかば(近頃は姫が非常に思い詰めていらっしやうなので)、かの殿の、*わづらはしげに、ほのめかし聞こえたまふことなどもありき(大将殿が、他の男の出入りを疑いなさって、苛立たしそうに、姫の不貞を責めなされることを仄めかし申しなさることなどもありました)。 *「わづらはしげに」は<疑念がある事を、(大将殿が)苛立たしそうに>、「ほのめかし聞こゆ」は<大将殿が、姫に間違いがあれば許さない意向を、ほのめかし申す>、と読んで置く。なっていない文に見えるほど分かり難い言い回しだが、恐らく是は、近くにいる女房が聞きかじっても分からないように言葉を濁した言い方で、事情を知る時方だけに分かるように話した、侍従の苦心の表れなのだろう。尤も、大将が男の出入りを疑って警備を固めたことは他の女房も知っているの、何となくそれらしい話くらいは女房にも分かるのかも知れないが、その大将の警備強化指示自体に付いては、先だつての宮の訪問時の門番の警戒ぶりを時方は身を以て知っているの、侍従が時方にわざとその辺をぼかして、こういう言い方をすることで、時方には、大将が既に姫と宮との仲に気付いている、と察しが付くような気はする。で、そういう息詰まる臨場感を当時の読者は、こういう語り口から感じ取ったのかも知れない。が、私にはただただ分かり難い難文で、臨場感の実感など到底覚束無い。

御母にもものしたまふ人も(母上でいらっしやる人も)、かくののしる乳母なども(こうして泣き喚いている乳母も)、初めより知りそめたりし方に渡りたまはむ(初めに知り染めた殿方

に姫君が引越しなさる)、となむいそぎ立ちて(ということで準備して)、この御ことをば(こちらの御話に付いては)、人知れぬさまにのみ(姫君の心一つに)、かたじけなくあはれと思ひきこえさせたまへりしに(有難い幸せと思ひ申しなさっていたので)、御心乱れけるなるべし(お気持ちが整理出来なくなってしまったのでしょう)。あさましう(ですから姫は傍目には、突然に)、*心と身を亡くしたまへるやうなれば(錯乱して失踪なさってしまったようなので)、かく心の惑ひに(乳母などはこのように動転して)、*ひがひがしく言ひ続けらるるなめり(いつまでも姫を諦められずに、あのよう言い続けずには居られないのでしょう)」「*「ころとみをなくしたまへる」は<心を失くす=錯乱する>と<身を失くす=失踪する>と<身を亡くす=死ぬ>とを組み合わせた<錯乱して死のうと失踪なさった>という言い方で、この場で侍従が思い付くには気が利き過ぎているので、恐らく<絶望して身を投げた>ことを言う常套句なのだろう。それだけに、それらしい書置きがあった上での自害という事情も察せられる言い方、だったのかもしれない。*「ひがひがし」は何かにつけて<意固地になっている→極端だ>という一般形容の語用が多いのだろうが、此处では具体的にその<拘り>の強さこそを言っているのだろう。つまり、いつまでも姫を諦められない。当然だ。乳母は姫の幸せを願って赤子の時から世話をして来て、乳母自身もそれを励みに生きて来たのだから。

と(と真相の一端を)、さすがに(そうは言っても)、まほならずほのめかす(それとなく灰めかします)。*心得がたくおぼえて(姫の失踪は確からしいが、その死が確認されていないことに時方は、今はこれ以上の究明は無理に思えて)、*「心得がたし」は、侍従の説明が曖昧なので全体にはっきりしないということもあるだろうが、それでも自害を灰めかす書置きがあったの失踪らしいとは伝わったのであり、むしろ核心は乳母が言った「むなしき骸をだに見たてまつらぬが、かひなく悲しくもあるかな」という亡骸が見つからないという点なのであり、それでは姫の死が確認されていない、ということに時方の関心はあるのだろう。心が離れて、生活実態も遠い人の生死は、それなりに気に掛かる程度だが、大事な人の死は亡骸を見るのが辛くても、事実確認が出来れば気持の整理も付くが、失踪死は亡骸を確認出来ないもどかしさが重く引っ掛かって、多分いつまでも心に穴が開く。

「さらば、のどかに参らむ(それでは落ち着いてから改めて参ります)。立ちながらはべるも(立話で済ますのも)、いとことそぎたるやうなり(あまりに簡略すぎるので)。今、御みづからもおはしましなむ(また、宮様御自身もお見えになるでしょう)」

と言へば(と言うと)、

「あな、かたじけな(何と畏れ多い)。今さら(今になって宮様と姫君の御仲を)、人の知りきこえさせむも(世間に知らせ申すのも)、亡き御ためは(亡き姫君への花向けとしては)、なかなかめでたき御宿世見ゆべきことなれど(なるほど内親王の御寵愛を受けた名誉ある御運勢とも思われそうなことですが)、忍びたまひしことなれば(姫君がお隠しになっていたことなので)、また漏らさせたまはで(他には洩らしなさらずに)、止ませたまはむなむ(終え為さるのが)、御心ざしにはべるべき(姫の御意向に沿いましょう)」

*ここには(などと言って、侍従は)、かく世づかず亡せたまへるよしを(このように姫が変死なされた理由を)、*人に聞かせじと(他の女房に知らせまいと)、よろづに紛らはすを(何とか誤魔化しているのを)、「*自然にことどものけしきもこそ見ゆれ(いつまでもこうして話し込んでいては、事が露見しかねない)」と思へば(と思ったので)、かくそそのかしやりつ(ともかくは時方を早く帰しました)。*「ここ」は<侍従>。*「人」は<この山荘の他の女房>。*「じねんに」は、こうして長々と侍従が時方と話し込んでいると、他の女房が侍従と時方を恋仲などではなく、姫の死に付いて相談していると疑って、時方の素性を調べ出して、遂には姫と宮との不貞が露見する、みたいなことらしい。

[第五段 浮舟の母、宇治に到着]

雨のいみじかりつる紛れに(大雨の中を)、母君も渡りたまへり(母君もお見えになりました)。さらに言はむ方もなく(他に言う事も無く)、

「目の前に亡くならむ悲しさは(目の前で娘の死を見る悲しさは)、いみじうとも(どんなに辛くても)、世の常にて、たぐひあることなり(世の中にはよくあることです)。これは、いかにしつることぞ(しかし、亡骸も無いとは何としたことか)」

と惑ふ(と狼狽します)。かかることどもの紛れありて(大将殿と兵部卿宮に愛された板ばさみで)、いみじうもの思ひたまふらむとも知らねば(姫が非常に思い詰めていらっしやったことも知らないの)、身を投げたまへらむとも思ひも寄らず(母君は姫が宇治川へ身投げなさったとは思ひも寄らず)、

「鬼や食ひつらむ(鬼が食ったのか)。狐めくものや取りもて去ぬらむ(狐のような変化の者が連れ去ったのか)。いと昔物語のあやしきものことのとひにか(昔話の変な出来事には)、さやうなることも言ふなりし(そんなことも言ってあるが)」

と思ひ出づ(と思い出します)。

「さては、*かの恐ろしと思ひきこゆるあたりに(さては、あの恐ろしいと思ひ申す大将殿の御正室のところに居る)、心など悪しき御乳母やうの者や(意地の悪い御乳母のような者だろうか)、かう迎へたまふべしと聞きて(殿が姫をこのように新居にお迎えなさるようだと聞いて)、めざましがりて(目障りに思っ)、たばかりたる人もやあらむ(さらい出した者でも居るのだろうか)」 *「かの恐ろしと思ひきこゆるあたり」は注に<薫の正室女二宮をさす。>とある。この母君は上臈上がりなので、女房の実態の一面を示してはいるのかも知れない。

と、下衆などを疑ひ(と手引きした者がいるかも知れないと下働きの者を疑い)、

「今参りの、心知らぬやある(新参者で縁故の無い者は居ますか)」

と問へば(と尋ねると)、

「*いと世離れたりとて(宇治は京から遠すぎると言っ、)ありならばぬ人は(不慣れな新参者は)、ここにてはかなきこともえせず(此処では少しも勤まらず)、*今とく参らむ(新居の方には直ぐに参って、お仕え申します)、と言ひてなむ、皆(と言っ皆)、そのいそぐべきものどもなど取り具しつ(そのために用意した服や小物一式を取りまとめて)、帰り出ではべりにし(各自の自宅に持ち帰っています)」 *「いと世離れたり」は注に<宇治はたいそう不便な田舎だと言っ、の意。>とある。 *「今」は<また今度>という社交辞令かと思っ、下「そのいそぐべきもの」とあるので<今度移る京の新居へ>という具体的な意味での語用らしい。

とて(と乳母は答えて)、もとよりある人だに(元から居た女房でさえ)、片へはなくて(京でのお仕えに備えて、半分は自宅待機して)、いと人少ななる折になむありける(今はとても人手が少ない時ではあつたのです)。

[第六段 侍従ら浮舟の葬儀を営む]

侍従などこそ、日ごろの御けしき思ひ出で(侍従は姫の近頃の御様子を思い出して)、「身を失ひてばや(死んでしまいたい)」など、泣き入りたまひし折々のありさま(などと泣いていらっしやつた時のことや)、書き置きたまへる文をも見るに(書き置きなさつた手紙まで見ると)、「*亡き影に」と書きすさびたまへるもの(「亡き影に」と書き流しなさつた御歌が)、硯の下にありけるを見つて(硯の下にあつたのを見つて)、川の方を見やりつ、響きのしる水の音を聞くにも(川の方を見遣つては、轟音を上げて流れる水の音を聞くにも)、疎ましく悲しと思ひつ(無念で悲しく思いながら)、 *「亡き影に」は注に<浮舟の「なげきわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ」(浮舟)とあつた歌の文句。>とある。この姫の独詠歌は浮舟巻七章六段で、宇治へ訪れた兵部卿に、警護が固くなつた姫が会えなくなつたことで、姫が入水を決意した時の歌ではあるのだから、この歌からは、この不都合な事態の清算を一身に背負わされた、と姫が思い込んでいたことから来る苦悩が、侍従になら読み取れたのだから。

「さて(あの川に身投げして)、亡せたまひけむ人を(亡くなくなつてしまつたらしい人を)、とかく言ひ騒ぎて(いろいろ話題にして)、*いづくにもいづくにも(どちら様に於かれても)、いかなる方になりたまひにけむ(どういふことにお成りなのだろう)、と思し疑はむも(と姫の事情を不審に思つて調べ為さるもの)、*いとほしきこと(困ります)」 *「いづくにもいづくにも」は述語が「思し疑はむ」と敬語遣いなので、母君や大将殿を念頭に置いているのだから。 *「いとほし」の対象は誰か、または何か。姫の死に付いて詮索するのは、恐らく誰にとつても益無きことで、しかし、不審死を関係者が放つて置ける筈も無く、やはり、この現状が如何にも具合が悪く、とにかく<困る>のだから。

と言ひ合はせて(と右近に相談して)、

「忍びたる事とても(兵部卿宮との御仲は、隠し事と言つても)、御心より起こりてありしことならず(姫の方から起こした不始末ではありません)。親にて(だからこの三角関係は、親御として)、亡き後に聞きたまへりとも(娘御の死後に聞き知りなさつたとしても)、いと*やさしきほどならぬを(決して恥づかしい話ではないのですから)、ありのままに聞こえて

(ありのままの事情をお話し申して)、かくいみじくおぼつかなきことどもをさへ(このように丸で訳の分からない状態で)、かたがた思ひ惑ひたまふさまは(いろいろ思い迷っていらっしやるよりは)、すこし明らめさせたまつらむ(少し事情を分かっている頂きたいものです)。*「やさし」は<「瘦す(やす、やせる)」の形容詞化。肩身が狭く身も痩せるような思いであるというのが原義>と古語辞典にある。痩せている→目立たない→控え目だ→大人しい→優しい、と転じたらしい。「やさしきほど」は<肩身の狭い身分=低い身分の者>という言い方で、兵部卿の身分の高さを言っているのかとも思ったが、兵部卿は親王で身分は高いと言うよりも<やんごとない>なのであって、こんな敬語遣いも無い言い方は失礼に当たるだろうから、この「やさしきほど」は三角関係自体を<恥ずかしい話>として、それが姫の所為ではないのだから、親として<恥には当たらない>という理屈を言っている、ようだ。

亡くなりたまへる人とても(亡くなった姫にしても)、骸を置きてもて扱ふこそ、世の常なれ(亡骸を安置して弔うのが世の常なので)、*世づかぬけしきにて日ごろも経ば(このように亡骸が無いまま突然の失踪で行方不明という事では、弔いもせずに何日も経つことになるので)、さらに隠れあらし(余計に噂が立つだろう)。なほ、*聞こえて(やはり母君には事情をお話しして)、今は世の聞こえをだにつくろはむ(今は早く葬儀を上げて事態收拾を図り、世間に噂立つのを防ぎたい) *「世づかぬけしき」は<変な状態=突然の失踪>ということだろうか。で、「日ごろも経ば」は<失踪だから弔いのないまま日が経つ→いつまでも事態が收拾しない>ということだろうか。どうも、そう取るのが筋が通り易そうだ。しかし、亡骸が無いという事に関しては、姫が宇治川へ身投げしたのは確かだとして、川の流れが早くて遠く川下まで運ばれたとして、直ぐには遺体が浮かばないか、あるいは浮かんでも人目に付かないか、ともかく暫くは見つからないとして、必ずしも葬儀を急がなくても、理由は不明なままの失踪で、川に嵌った可能性も高いらしいの言い方にして置いても、むしろこの山荘だからこそ有り得る話になりそうな気がする。右近や侍従やその他の女房や見張り番たちの不注意は咎められるだろうが、それは理由如何に関わらず、姫が行方不明になっていることだけで責められるのであり、熱にうなされて夢遊するとか、突然気が触れるとかいうことはあるのだから、水難事故説はそれなりに説得力がある筈で、というか、右近や侍従にしても、この日の内に自害と断定できるほどの根拠が十分あるとは言いきれず、この時点で姫の自害を母君に説くのはいささか先走りなのではないか、と思う。だから、この話し運びにはどうしても強引さを感じる。*「聞こえて」は注に<浮舟母に浮舟の死を。>とある。もう少し言えば、自害に至る経緯事情と事態收拾を図るための急な葬儀の進言、をしたのだろう。

と語らひて(と話し合っ)、忍びてありしさまを聞こゆるに(密かに姫の生前の三角関係を母君に申し上げるが)、言ふ人も消え入り(話す侍従も気力が萎え)、え言ひやらず(言葉に詰まり)、聞く心地も惑ひつつ(聞く母君も気が動転して)、「さは(それでは姫は)、このいと荒ましと思ふ川に(このとても荒々しい川に)、流れ亡せたまひにけり(身を投げて亡くなりなされたか)」と思ふに(と思うと)、いとど我も落ち入りぬべき心地して(いっそ自分も川に嵌って沈んでしまいそうな気がして)、

「おはしましにけむ方を尋ねて(流れていらっしやった所を探して)、骸をだにはかばかしくをさめむ(姫の亡骸だけでも葬りたい)」

とのたまへど(と仰ったが)、

「さらに何のかひはべらじ(それは無駄でございましょう)。行方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ(行方も知れない大海原に流されていらっしやるでしょう)。さるものから(そうでありながら)、人の言ひ伝へむことは(姫の搜索で、行方不明でいらっしやる事を人が言い触らすのは)、いと聞きにくし(とても聞こえが悪いです)」

と聞こゆれば(と侍従が申し上げると)、*とざまかくざまに思ふに(探したいが探さない方が良いでしょうかと思うと)、胸のせきのぼる心地して(母君は悲しみが胸に込み上げて)、いかにもいかにもすべき方もおぼえたまはぬを(どうして良いか分からなくお成りなので)、この人びと二人して(この右近と侍従の二人で)、*車寄せさせて(車を寝殿に寄せさせて)、御座ども(姫の御座所の敷物や)、気近う使ひたまひし御調度ども(いつもお使いになっていた御化粧道具類や)、皆ながら脱ぎ置きたまへる御衾などやうのものを取り入れて(もぬけになっていた御布団類などを取りまとめて車に入れて)、*乳母子の大徳(身内同然の乳母子の僧侶や)、それが叔父の阿闍梨(その叔父の高僧や)、その弟子の睦ましきなど(その弟子の近しい者などや)、もとより知りたる老法師など(以前から知り合いの老法師などの)、御忌に籠もるべき限りして(姫の忌籠もりで寝殿で服喪する者だけで)、人の亡くなりたるけはひにまねびて(亡骸があるように装って)、出だし立つるを(焼場へ出発するのを)、乳母、母君は、いとみじくゆゆしと臥しまろぶ(乳母と母君は、亡骸も無い姫の葬送とは何と忌まわしいと身もだえして泣きます)。*「とざまかくざま」は姫を搜索したものが止めて置くべきかで母君は迷ったようだが、川沿いの邸ならではの事故という言い方は出来るのだから、亡骸を捜さないなどという選択肢は親心には無い、と私には思えるので、前のノートの繰り返しになるが、この話し運びは少し強引だ。もし、実相を写しているなら、此处に語られていない何か別の理由があって搜索を断念せざるを得なかったのだろう、と思わざるを得ない。*「車寄せさせて」は注に<『集成』は「遺骸を運び入れる体を装う」と注す。>とある。以下の一連の描写は、確かに姫が部屋で病死したように取り繕って葬送の車を「出だし立つる」ようだが、姫の失踪は他の女房も見回りの侍も、恐らく出入りの大将殿の荘園の者たちも知っているだろうに、「この人びと二人して」葬儀が執り行えた、と解して本当に良いでしょうか。何とも釈然としない展開だ。*「めのごのだいとく」は注に<浮舟の乳母の子である大徳。>とある。右近の兄弟なのか、別の乳母の子なのか、は分からない。

[第七段 侍従ら真相を隠す]

大夫、内舎人など(右近大夫や内舎人など)、脅しきこえし者どもも参りて(男出入りの不始末が無いように、強く注意申した見回りの者たちも参って)、「たいふ、うどねり」は浮舟巻六章七段に右近の意見として「この大将殿の御荘の人びとといふ者は、いみじき無道の者どもにて、一類この里に満ちてはべるなり。おほかた、この山城、大和に、殿の領じたまふ所々の人なむ、皆この内舎人といふ者のゆかりかけつつはべるなる。それが婿の右近大夫といふ者を元として、よろづのことをおきて仰せられたるなり」と語られたのが初出だ。が、この「この内舎人」という言い方の「この」の相当する前説は無く、であれば一般語用として<此处に詰めている>という意味と取ったが、女語りの所為なのか、脈絡の段取りが悪く組

織体系の説明がないので、乳母や右近や侍従などこの大夫や内舎人などとの上下関係や管理体制・体系が分からず、巻頭の「かしこには、人びと、おはせぬを求め騒げど、かひなし。物語の姫君の人に盗まれたらむ明日のやうなれば、詳しくも言ひ続けず」という省筆もあって、本来の出番も割愛されていたようであり、此处でも唐突な登場の印象を受ける。

「御葬送の事は、殿に事のよしも申させたまひて、日定められ(御葬送の事は殿に御意向を伺って日取りを決められ)、いかめしうこそ仕うまつらめ(格式を以て執り行うのが常道です)」

など言ひけれど(と言ったが)、

「ことさら、今宵過ぐすまじ(どうしても今夜の内に終えたいのです)。いと忍びてと思ふやうあればなむ(とにかくこの惨事を目立たせたくないからです)」

とて(と右近たちは言い張って)、この車を、向かひの山の前なる原にやりて(この車を向かいの山の前の原に進めて)、人も近うも寄せず(誰も寄せ付けないようにして)、この案内知りたる法師の限りして焼かす(この事情を知っている法師だけで焼かせます)。いとはかななくて、煙は果てぬ(まことにあっけなく煙は消えました)。

田舎人どもは(宇治の村人である内舎人たちは)、なかなか(都人以上に)、かかることをことごとくしなし(こうした葬儀を大々的に執り行い)、言忌みなど深くするものなりければ(喪中謹慎を厳重にするものだったので)、「あなかびとども」は注に<田舎人とは大夫や内舎人をさす。『完訳』は「彼らは都人よりかえって、葬送などを丁重に扱い縁起などもかつぎやすい」と注す。>とある。

「いとあやしう(いや変だ)。例の作法など(姫に相応しい葬儀の作法の)、あることども知らず(決まった事をせず)、下衆下衆しく(民百姓のように)、あへなくてせられぬることかな(簡素に葬られなさったものだ)」

と誹りければ(と非難する者もあれば)、

「*片へおはする人は(片親でいらっしゃるこの故人の葬送は)、ことさらにかくなむ(別胤の兄弟から変死を非難されかねないので、特にこのように簡素に)、*京の人はしたまふ(京の人はなさるようだ)」 *「かたへおはするひと」は注に<以下「京の人はしたまふ」まで、大夫らの詞。『完訳』は「兄弟のいらっしゃるお方。一説には、一方で妻妾をお持ちの薫、とする」と注す。>とある。が、「かたへ」がどうしても<兄弟>を意味するのかわからないし、兄弟と言っても、この姫の場合もそうだが、いろいろな人が有り得るのだから、兄弟があるという事だけで一般化される標準様式・儀式作法が有ると思えない。この姫の主だった特質は、内舎人などの認識としても、大将の側室(候補)あたりだったかと思われるので<妻妾がある>と解すべきだ。とも思ったが、二章六段にこの里人の言葉を受けて薫大将が「母のなほなほしくて、兄弟あるはなど、さやうの人は言ふことあんなるを思ひて、こと削ぐなりけむかし」と解しているらし

い文があるので、それを踏まえてこの「片へおはする」を考えてみる。というか、そも注釈において、下文に左様の語りがある事を指摘した上で、「兄弟のいらっしゃるお方」という語意を示すべきかとは思いますが、それでも「かたへ」が<兄弟>を意味するとは思えないので、この語意を得るべく、当文と二章六段の文意を良く見比べてみたい。とまず、当文の「片へおはする人はことさらにかくなむ」の「かくなむ」が、二章六段で「こと削ぐなりけむ(簡素な葬送にした)」と語られるのは、此処の葬送の描写に合致する。と、「片へおはする人」=故人=「母のなほなほしくて、兄弟ある」という対比関係に読めるので、是をそのまま逆算すると「かたへ」は<片親で異父兄弟から変死を非難されそうな立場>ということなり、それは確かに常陸姫の立場を言い表しているが、「かたへ」の語感としては「兄弟のいらっしゃるお方」ではなく<片親でいらっしゃるお方>の方が馴染む。ただ<片親>であることが「ことさらにかくなむ」と言うのは、その母親が常陸守家に後妻に入って、異父兄弟から非難される、という葬送を急ぐ肝心の理由が欠落しているので、注釈では「兄弟のいらっしゃるお方」としてあるのかもしれない。が、しかし、補語を他の文から引っ張ってくるのは、文意を得るために必要な場合もあると思うが、本文自体を他の文を引いて言い換えるのは誤解を招くどころか、それ自体が誤訳だ。注意すべきは、此処の「かたへおはする」は一般形容ではなく、他ならず常陸姫その人の個別事情を示す言い方を村人はしているのであり、この姫を<片親でいらっしゃる>と言えば、他の属性である<後妻に入ったその片親はその家でも子を設け、姫には異父兄弟がいて、変死が彼等に迷惑となりかねない>という事情も、この場にいる村人同士には共通認識されていた、という場面状況を読むことであり、その状況まで言い表せる言い換えが出来ればより望ましいのかもしれないが、本文を曲げてまで言い換えては本末転倒だ。*「きゃうのひと」は一般語用ではなく、母君を特定した婉曲表現。また、「したまふ」は終止形にせよ連体形にせよ、形容述辞が「かくなむ」とある推量構文になっているので、是は言い差した言い方なのであり、下に<や>とか<べし>が省かれているのだろう。

などぞ(などと言ったり)、さまざまになむやすからず言ひける(さまざまに穏当な遣り方ではないとこの葬送を悪く言っていました)。

「かかる人どもの言ひ思ふことだに慎ましきを(こういう田舎侍たちが姫の死を疑って口にすることでさえ気が引けるのに)、まして、ものの聞こえ隠れなき世の中に(まして口さがない世間にあつて)、大将殿わたり(大将殿が)、骸もなく亡せたまひにけり(亡骸も無く入水して亡くなった)、と聞かせたまはば(と聞き知りなされば)、かならず思ほし疑ふこともあらむを(必ず他の男の所への脱走をお疑いになるだろうし)、宮はた(兵部卿宮にしても)、同じ御仲らひにて(大将殿と親しい御仲なので)、さる人のおはしおはせず(姫を愛人にしていらっしゃったかどうかは)、しばしこそ忍ぶとも思さめ(暫くは隠そうとお思いでも)、つひには隠れあらじ(結局は隠しきれないでしょう)。

また、定めて宮をしも疑ひきこえたまはじ(しかし、大将は必ずしも不倫相手を宮と決め付けて疑いは為さないでしょう)。いかなる人か率て隠しけむなどぞ(誰かが姫を連れ去って隠したのだろうと)、思し寄せむかし(お考えになるかも知れない)。生きたまひての御宿世は(生きていらっしゃる時の姫の御宿縁は)、いと気高くおはせし人の(大将と兵部卿に愛されるという、とても高貴なものでいらっしゃったのに)、げに*亡き影に(姫自身が「亡き影に」と歌にお詠みなさったように、その死後に)、いみじきことをや疑はれたまはむ(ひどく

男にだらしのない女と疑われなさりそうです)」 *「亡き影に」は注にく「げに」は浮舟の独詠歌「なげきわび」歌を受ける。「亡き影に」はその歌中の語句。>とある。独詠歌は浮舟巻七章六段にあった「嘆きわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ」(和歌 51-19)で、此処では<死後にだらしのない女との噂が立つ事が無念だ>という意味で引いているのだろう。が、むしろ、この歌のそういう一意を確認する為に、わざわざ「また定めて宮をしも疑ひきこえたまはじ」と右近に言わせたようにも見える話し運びだ。尤も、兵部卿は当然に大将に疑われるし、兵部卿も「つひには隠れあらじ」と愛人関係は認めるとしても、隠し去ってはいないのだから、絶対に連れ去りは否定するだろうし、調べてもその事実は無いと大将も知るだろうから、その上で、亡骸が出て来ないままなら、大将にしても、いや宮ですらも、他の男の存在を疑うことは有り得るし、まして、そうした噂が立つことは十分に考えられる。が、今の段階で、と言っても、今が姫の失踪の翌日なのか、数日後なのかははっきりしないが、それでもまだ本当に失踪自体に対処すべきと思われる、この早い時期に、絶対に亡骸が見つからないとの前提に立ったような、右近と侍従の考え方や姿勢にはどうしても疑問が残る。ただ、葬儀を急ぐ為に、殊更に病死を装った、という可能性はあるのかも知れない。当時、流行の疫病があって、それが急死の理由として都合が良く、その筋書きで押し切る為にも火葬を急いだ、ということは、防疫としての説得力もあって上手い手だったのかもしれない、が、それでも、亡骸が上がらない、上がっても白を切る、という見込やら方針は納得し難い。

と思へば(と思えば)、ここの内なる下人どもにも(この山荘の下人たちにも)、今朝のあわたたしかりつる惑ひに(今朝の姫の失踪騒動に付いて)、「けしきも見聞きつるには口かため(失踪と知っている者には口止めをし)、案内知らぬには聞かせじ(知らぬ者には失踪とは聞かせず)」などぞたばかりける(などして、普通の病死のように取り繕いました)。

「ながらへては(年月が経ったら)、誰にも(どなたにも)、静やかに(心静かに)、ありしさまをも聞こえてむ(本当の事情をお話し申そう)。ただ今は(しかし今は)、悲しき覚めぬべきこと(悲しきよりも三角関係の疑惑が湧くような話を)、ふと人伝てに聞こし召さむは(不意に人伝にお聞きになるのは)、なほいといとほしかるべきことなるべし(やはりとても姫の御遺志に反することと懸念されます)」

と、この人二人ぞ(と右近と侍従の二人は)、深く*心の鬼添ひたれば(姫と兵部卿との御仲を助長申したことで、姫の死を招いたと深く自責の念に駆られていたので)、もて隠しける(姫が入水自決なさったことを隠したのです)。 *「心の鬼」は古語辞典にく良心の呵責>とあるが、此処では不貞の善悪ではなく、姫を自害に追い詰めることになった兵部卿との逢瀬を、いくら姫自身が女冥利に感じている様子だとしても、自分たちの感性で助長してしまったこと、つまりは姫の純真に気付かずに、だから姫の抜け出しにも気付かずに、みすみす入水させてしまったことに対する<自責の念>を言うのだろう。